

神奈川の道徳

日本道徳教育学会神奈川支部 創設 10 周年記念 道徳教育研究大会 2022

●授業実践提案

提案①「小学校特別支援学級における道徳教育の実践～個別最適な学びと協働的な学びを目指して～」

鎌田 清志 先生(横浜市立六浦小学校)

○道徳教育と自立活動の関連

道徳教育…教育活動全体を通じて行うもの。児童の発達段階を考慮して指導を行う。自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことが目標。

自立活動…障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服し、自立し社会参加する資質を養うため、教育活動全体を通じて適切に行う。自立活動の内容(6区分27項目)には、道徳科の内容項目と重なる部分が多く見られる。

教育活動全体で行うこと、発達の段階に応じた指導、道徳科と自立活動の内容の関連、多様な道徳的課題という視点から、日常生活における学びが大切である。それを基盤とすることで、道徳科の授業における学びがたくさん得られる。



○「個別最適な学び」と「協働的な学び」の捉え

個別最適な学び・・・自立に向けて、一人ひとりの道徳的課題の解決につながる気付きや学び。

支援級の子どもたちには、個別の指導・支援計画に基づいて指導や支援を行う。

協働的な学び・・・友達や教職員、保護者との関わりを通じた、気付きや学び。

○日常生活における学び

支援級では、日常生活での学びの積み重ねが道徳科の授業での学びにつながる。

約束やルールを守ることが苦手(規則の尊重)

- ① ルールを伝える
- ② ルールの意味を伝える
- ③ ルールを守ったときと守らなかったときとどうなるか一緒に考える

自分の非を認められず、友達とトラブルになってしまう(善悪の判断)

- ① 何があったかを整理する(書き出す)
- ② 本人の気持ちを確かめる→寄り添う
- ③ どうしてそうなったかを一緒に考える
- ④ 今後どうしたらいいか一緒に考える

やりたくないことや苦手なことは基本的にやらない(努力と強い意志)

- ① どうしてやらないのか確かめる
- ② それが解決したらやれるか確かめる
- ③ 解決方法を一緒に考える

これらの日常生活での指導を通して

- ・ルールを守るよさがわかる
- ・よいことと悪いことの区別ができる
- ・やるべきことや、やると決めたことに取り組む



通常級での学習や人間関係も安定

○**道徳科の授業の進め方について**

①一人ひとりの目標を決める

学年ごとの内容項目と個別の指導計画、児童の実態を照らし合わせる

②イメージしやすい具体的な場面を提示する

経験のない出来事、登場人物になりきって考えるのは難しい場合があるため
オリジナルキャラクターを通して教材を伝え、考えさせる

③みんなの考えを見えるようにする

発言が苦手、発語ができない、考えて言葉にするのが難しい→にこにこメーターを使う

○**授業実践例 努力と強い意志**

主題設定の理由

- ・苦手なことは取り組みにくい
- ・最後までやらずに諦めてしまう
- ・励まされたり、賞賛されたりするとやりきることができる

教師のねがい

- ・諦めずに取り組むことのよさに気付いてほしい
- ・挑戦しようとする態度を身に付けてほしい

オリジナル教材

- ・うららちゃんが苦手な鉄棒の練習を頑張る
- ・くじけそうになりながらも最後までやりきり、逆上がりができるようになる
- ・友達や先生、家族に褒めてもらう

教材を通して気付いた学び

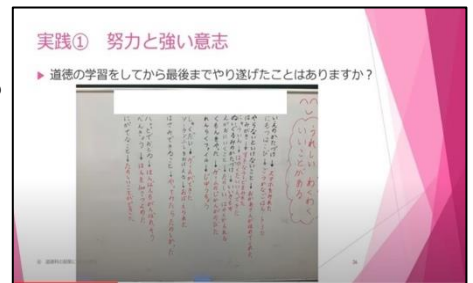
- ・「最後までやる」「頑張る」という強い気持ちをもつ事が大切
- ・最後までやってよかった いい気持ちになれる いいことがある

ふりかえり

発問「今までを振り返って、うららちゃんのように頑張って活動したことで、いい行動があった事はありますか？」

発問「道徳の学習をしてから、最後までやり遂げたことはありますか？」

→子どもたちから、たくさんのお話が出てきた。



○**学習を通して**

- ・最後までやり抜くことのよさに気付いた
- ・生活を振り返って、実践できた
- ・友達の話聞いて、自分の経験を振り返れた
- ・心情ではなく、「いいこと」に向いてしまった

提案②「中学校における個別最適な学びと協働的な学びを実現するための道徳科の授業を目指して」

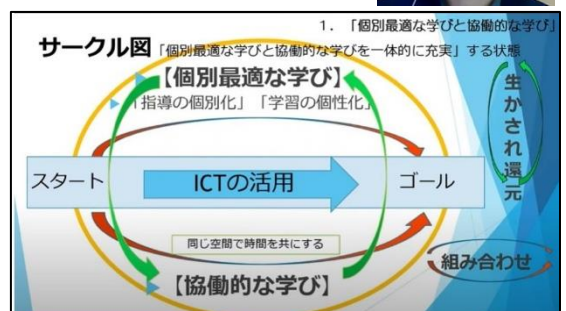
園山 久美子先生(横浜市立山内中学校・昭和女子大学大学院)

○「**個別最適な学びと協働的な学び**」とは

個別最適な学び…多様な子どもたちを一人残すことなく育成する(指導の個別化、学習の個性化)

協働的な学び…異なる考え方が組み合わせたり、よりよい学びを生み出す

この二つを一体的に充実させる事が大切で、授業全体の中の様々な過程の中に存在する。



○授業実践の中の「個別最適な学びと協働的な学び」

教材名「心でいただく伝統の味」 内容項目：B-7 礼儀

(導入) 作法があることを知る

・個別最適な学び (学習の個性化)

実物投影機を使って箸の置き方を見せる。生徒には割り箸を配って実体験させる

・協働的な学び

隣の生徒と正しい置き方についての会話が生まれ、お互いの感性の触れ合う場にする

(展開前段①)「どうして正しい箸の使い方があるのか」を考える

・個別最適な学び (学習の個性化)

嫌い箸についての画像を見せて、嫌い箸がなぜいけないかを考えた

・協働的な学び

画像を見ながら、感想を何度も交流し合った

(展開前段②) 発問「他にもあなたたちの知る礼儀作法はありますか。」

発問に対する各自の答え(授業前の挨拶等)が学習の個性化であり、クラスの中での発言なので、協働的な学びも組み合わさっている。

また、「授業前の挨拶」の発言から、他の生徒にとって更なる学習の個性化につながり、その反応から発言者にとって協働的な学びとなって還元される。

ICT機器を活用すると、発言の苦手な生徒の考えもクラスに共有でき、効果的な個別最適な学びと協働的な学びに繋がるかもしれない。

(展開後段) 価値把握をし、共通解を導き出す

価値把握をする事が自分ごととして考えるため、学習の個性化と考えられる。また、同じ空間の中で時間を共にし、共通解を導き出す協働的な学びの時間。そして、協働的な学びの成果を個別最適な学びに活かす姿が見られた。さらに、個別最適な学びが協働的な学びにも還元されていた。



○アンケート結果より

- ① 今日の授業はいかがでしたか？
- ② クラスのなかまの意見は聞けましたか？
- ③ 自分の意見をクラスのなかまに言えましたか？

授業を行った2クラスについて、上記の観点でふりかえりを行った。①と②はどちらのクラスも同じような結果になった。③は、普段の授業で発言の多いクラスでは「自分の意見をあまり言えなかった」と分析する生徒が多かった。

○成果と課題

成果	<ul style="list-style-type: none"> ・「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実の重要性に気付いた。 ・授業実践の反応はクラスにより異なり、結果を指導の個別化に繋がられた。 ・ICT機器を活用する事で、多くのメリットを享受できた。
課題	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒のICT機器の操作能力に対して、個人差が大きい。 ・本音を語りやすくする工夫が必要。(ワークシートの回収方法、授業後の会話など) ・ICTを活用した時短テクニック。 ・家庭とつながる方法。 ・余韻をもって終わるような教材を準備すること。

○まとめ

- 個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させるには、子どもたち自身が自立して学習に臨めるような環境づくりをする事が大切である。
- 「学習者は自分をよく知らなければならない。」 自分を知るからこそ、自らの最適な学習を調整できる。自分を知るからこそ、人との関わりの中で協働的な学びの実現が可能である。

●シンポジウム「道徳科における個別最適な学びと協働的な学びを実現するために大切なこと」

(田沼先生)

神奈川支部の研究テーマは、「道徳科における個別最適な学びと協働的な学びを実現させるために大切なこと」、このテーマは「令和の日本型学校教育の構築を目指して」の内容そのもの。学習の主体としての主体的で対話的で深い学びを実現できる児童生徒をどう育成していくか。道徳が教科化したからといって、目先のことに囚われている限りは、児童生徒の豊かな心の成長は育めない、そのような問題意識のもと、シンポジウムを通してその道標を見出していきたい。



(浅見先生)

「GIGA スクール構想」とは、Society5.0の時代を生きるのにふさわしい。誰一人取り残さない公正に最適化されたということ。そして令和の日本型学校教育、全ての子どもたちの可能性を引き出し、個別最適な学びと協働的な学びの実現と示されている。また、ICTがそれを支えるツールになっていくことが強調された。目的はあくまで、資質能力を養うことであり、そのICTの活用そのものではない。



【実践例】

- ・事前アンケートを活用し、クラスの実態を共有することで問題意識をもって授業に臨めるようにする。
- ・自分の考えを端末に打ち込み、それを大画面で映し出して共有する。担任は、子どもが打ち込んでいる間は、手元のパソコンで内容を確認し、紹介したい考えを拾い上げる。手を挙げていなくても考えを紹介し、議論を深めることができる。
- ・美しいものを端末で写真を撮ってきておき、なぜそれが美しいと感じたかを紹介し合う。

個別最適な学びと協働的な学びをつなげて考えていく必要がある。デジタルとアナログはバランス良く取り入れていく。価値の理解から自己を見つめ、生き方についての理解を深める、それはこれまで通り大切なこと。

(澤田先生)

- ・「考える」の語源は「かむかう」（＝一人一人が違うことを突き合わせてみること）つまり、考えを共有していく時間で、対話はプロセスが全て。「工夫」は「手間暇をかける」、目の前の生徒のために知恵を絞れば、個別最適にならざるを得ない。
- ・中学校では「輪番制」を取り入れるべき、担任との関係が非常に難しくなる時期だから。
- ・中学校の道徳は、自明であると考えられていることを問い直す営みとしてあると考える。そもそも普通の人は、多面的に考えられない。自分のものの考え方から離れることができないため、「人の鏡」が必要になる。
- ・「倫理」というのは、個別のすべきこと、生き方について考える、中学校は道徳科から倫理へとつないでいく必要がある。
- ・認知的な共感（ホットな共感）を道徳教育では中心的に育んでいかなければならない。どう育んでいくか、非常に大きなテーマである。
- ・倫理的な思考というのは、個別的なものであり、思弁的な思考に留まらない。すべきことや生き方全体を問題にする。答えは定まっていない、現在進行形の重要な問題の検討が含まれる。
- ・日本の道徳の一番基本的なところは「私的道德」（良心の道徳）
- ・子どもから遠ざけなければならないのは、ニヒリズム的な冷笑的態度と教条主義的な狂信的態度、これが道徳・倫理で一番危険な態度。



(押谷先生)

・個別最適な学びと協働的な学び、一番大切にしなければならないのが、全ての子どもたちの可能性を引き出すという目的(=豊かな人生を送る)ということ。これは、一人一人がよりよい自分をつくっていける、自己形成がなされて、社会的な自立につながっていく、それをイメージしなければならない。

・OECD2030プロジェクトでは、個人 Well-being と集団 Well-being に向けて進化し続ける枠組みを提案することを目指している、これはまさに道徳科で行っていること。教師が子どもと一緒に主体的に行動し、学びの環境をつくることが大切。子ども一人一人が自分のよさや個性を活かして、自分なりの目標をもって計画的に学習に取り組む、それをサポートする。

・本来、「学び」とは、個別的な学びと協働的な学びが統合されているもの。必ず誰かの援助が必要で、友達とふれ合うことで発見がある。一人一人の学びそのものを最適にしていって、その子に応じた学びを考える。ICT や AI の活用は、その新しい可能性である。

・道徳的価値をどう捉えるか、やはり人間としてよりよく生きるということ、人や社会に対してよりよく生きようとすることである。頭で考えるだけでなく、日常生活の中でどうすればいいのかを考えながら知識を深め、学びを発展させていく。人間として生きることの誇り、自分や他者に対する信頼、未来への夢と希望を育めるようにしていく。それを共に交流しながら追い求める。その中心的な役割を担う特別の教科道徳、皆さんで工夫してほしい。



(田沼先生)

様々なキーワードが出ているが、本質的なところは何も変わっていないような印象を受ける。個別最適な学びと協働的な学びを、どのように捉えるか、如何だろうか。

(浅見先生)

小学校の発達段階で変わってくる。低学年段階では、「教える」という要素はなくてはならないかと思うが、いろいろな価値観に出会いながら、一人一人がよりよい生き方を求めていくというスタンスが大切だと考える。そういう意味で低学年は特別だと考える。

(押谷先生)

小学校低学年は、基本的な行動様式を子どもたちから引き出し、確認していく授業が大切。それを中学年、高学年と続けていくのでは嫌になってしまうので、興味関心、思考の深まりを抑えた上で授業を展開していく。高学年では、夢を描きながら現実の生活とつなげていきたい。中学校では、社会的な関わりの中で自分に何ができるか考えさせたい。

(澤田先生)

倫理は、高校では選択科目となり、4人に1人しか履修していない。「公共」という必修履修科目ができたが、これは公共道徳にかなりウエイトを置いている。個人の良心を養う道徳が中学校で途絶えてしまうことに非常に心配している。中学校で「本音」を思春期特有の欲望に負けることを本音と捉えられることがあるが、本来は子どもの理性的な部分のことであり、人間の誇りなどをもっと大切にしたい。中学校の先生には、特にその辺りを意識して授業をしてほしいと思っている。

(押谷先生)

本音というより本心を語るのが基本だと思っている。子どもたちの語りを大事にしたい。語りをしっかり保てる授業は、中学校、高校と難しくなる。ナラティブを引き出すにはどうするかを中心に授業改革できるとよい。

(田沼先生)

道徳科では、未だ認知的側面をあまり重視していないように感じられる。

(浅見先生)

ICT 端末を活用していくと、今までよりも本音を引き出しやすくなっていくと思う。また個人の考えも把握しやすくなる。では、何に配慮するべきか。それは、教師が教材に描かれていることを正解としないこと、内容項目を手がかりとして向かうべき道徳的価値に正解を求めていくと、子どもは先生の正解を探したり、道徳が嫌いになったりする。いかに子ども一人一人のよさを生かしながら、それでいてねらいに迫っていくか、教師の力量が一層求められていくのではないかと思う。

(澤田先生)

認知的な事柄が非常に大切になる。共感で言えば、情動的な共感とは反射的であるため、認知的な共感を育てていかなければならない。ただ、認知的側面を評価の対象にすると、道徳ごっこになる。子供が教師よりも過酷な人生経験をもつこともある。大切なのは、授業を通して、子どもが考えをつくること。それを心の中にしまっただけでもよい。変容を求めるのではなく、変容が起こっていることを願う、祈る。

(中野先生:新潟県)

「最適」というところに違和感がある。他教科では到達目標がある。道徳での「最適」をどのように考えていけばよいのか。

(浅見先生)

他教科は、明確な答えが見えやすい。道徳科は、自分の生き方を自分の納得のいくような答えに向かっていくので、明確な答えはない。道徳科の「最適」とは、自分の中の答えを見出しながら、友達の考えを聞き、自分に戻って自分の答えを見つける…そういう考えができていくと思う。

(押谷先生)

認知的な側面と関わるが、道徳の内容項目をどう捉えるかと関係する。達成目標でもって授業が良かったのではなく、それぞれの内容項目や発達段階と関わって、ねらいを深く考えられるようにする。子どもが「今まで気がつかなかった」「こんなことに気づいた」という姿をしっかりと引き出せるようにする。

(田屋先生)

協動的な学びを意識するあまり、内面の変化の形を求めてしまうことがあると思う。子どもの中に変容があればとも思うが、評価をどう考えるべきか。

(浅見先生)

みんなの考えを取り入れようとする姿勢がまず大切である。その中で、ICTがあると、自分の考えを表現しやすくなる。今までよりも授業に対して、責任感や使命感が高まり、自分の考えを持ちやすくなる。そういった一人一人の考えを活かして授業ができるとうい。

(澤田先生)

基本的に認知的なところで深まっているというのは取りづらい。生徒がこの時間で時間いっぱい考えて疲れたという時間がどれだけあったかを見取り、認め励ます声かけをしたい。「先生、気づいてくれたんだ。」というのは、生徒にとって背中を押す評価になりうる。

(押谷先生)

ICTの良さはデータが残ること。またそれを各家庭で活用することもできる。授業後に考えを深めることも可能となる。そういったことを積み重ねることで、「またみんなの意見を聞いてみたい」という思いが生まれ、協動的な学びを進んでいくと考える。

(浅見先生)

個別最適な学びと協動的な学びは、決して一斉授業の否定をしているわけではなく、ICT 端末を活用した令和の日本型学校教育と捉えてもらえるとよい。先ほどの話の中で、アナログで「どんな行為が大事か」「その行為に伴う心は何か」と話し合っているからこそ、成果がある。

私が、教員になろうと思ったきっかけは、金八先生に憧れていた。あのなんとも言えない生徒に寄り添う姿というのだろうか。「こういう先生になりたい」それができるのは、国語や算数ではなく道徳の授業だった。そこに道徳の魅力を感じたのがきっかけとなった。

(澤田先生)

人間としてのあり方・生き方という表現があって、その人間としての在り方というのはどういうものかということを考えた時、やはり人間は、天使でも悪魔でもなく、人間である。それはパスカルの言う中間者である。だけれども、良心をもってより良く生きようとする。ゲゲゲの鬼太郎でいえば、ねずみ男、半妖怪、まさにグレーである。そもそも善悪と

いうものに関心をもったきっかけは、小学校6年生の時の大河ドラマで『樅ノ木は残った』というものがあり、この主人公が白だか黒だかわからない。非常に灰色の人物で、小学校6年生だったので「この人、どういう考えをしているんだろう。」「人間って何なんだろう。」と思ったのが、回り回ってきた。ある意味、ニヒリズムに囚われがちなので、ニヒリズムにとらわれないで人間に対する信頼をどうやったら維持できるか、という関心があった。そういうところで、倫理学を専攻したことが、道徳を勉強する縁を私に作ったのだと思う。

(押谷先生)

このコロナ禍でも学力がそう低下しなかったという実態が見えてきている。課題は、いじめはなぜ増え続けているのか、道徳教育は機能していないと言われても仕方がない。他人の価値意識を受け入れようとする意識は育っているのだろうか、これから研究していかなければならないと考えている。

教材分析では、主価値と副価値を押さえた分析をしていくことが重要。副価値が主価値とのかかわりでどう捉えられるのかという押さえを子どもたちとすると、主価値に関する捉えをもっと広げることができるし、現実の生活と関わらせてより深く価値の意識が持てると思う。教師の説話、本来の趣旨は子どもが自己開示して、先生も自己開示していくこと。そして一緒になって、よりよい生き方を求めていく。

そして道徳の授業はそこで終わりではないので、どう事後へとつないでいくかが大切である。そこで、気になる子への個別的な指導など柔軟な対応が必要。

道徳に魅了されたきっかけは、中学校にいくと成績が公表され、優越感、劣等感を感じたとき、「これは教育なんだろうか、勉強はみんなが幸せになるためにと考えられるはずなのに、勉強を通して優越感、劣等感を植え付けられる、そんな教育でいいのか」と思っていた。

これからの課題としては、世界に発信できる道徳、“doutoku”こそ世界に発信できると思っている、みなさんと取り組んでいきたいと思っている。

(田沼先生)

シンポジストの3人のお話を伺っていて、先日の中教審の答申の中にあった「令和の日本型学校教育を担う」そのキーパーソンは教師個々だということを改めて思う。今日は最後に押谷先生がお話いただいたことをもって、シンポジウムを終了したいと思う。

活動が制限される中ではありますが、今後の道徳教育、道徳の授業について語れる貴重な機会となりました。また、次回も先生方と一緒に勉強できることを楽しみにしています。

(詳しい内容につきましては神奈川支部ホームページをご覧ください。) <http://www.doutokukanagawa.com/>